



もいきり苦勞しない。好きなことをおやんなさいと言つてあります。毒舌だが、学生を怒鳴つたことは一度もないという。小池教授にとって、過去は現在の鏡、歴史とはいまを考へることであり、世界の中の日本を学ぶことでもある。

歴史のうちに生の指針を探る

日本人には海外から評価されてはじめて自国の文化に誇りを持つところがある。映画「ラストサムライ」では自分を押し殺してまでも、職務に忠実であらうとする侍の姿が多くの日本人の郷愁を呼び覚ました。彼らの思想の基調となつたのが「武士道」だ。

武士道や幕末思想史に関する多くの著書を持つ小池喜明教授は、「為政者によつてその時代ごとに都合よく運用されてきたのが武士道」と業隠の有名な一文、「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」がひとり歩きする昨今の表面的な武士道ブームに警鐘を鳴らす。

幕末は日本が開国によつてこれまでの価値観を大きく転換することを余儀なくされた激動の時代。現代の日本にも大きく通じるところがある。「いまあなたがたはどう考へる。そういう意識がなかったら歴史は骨董品です」。



小池喜明
文学部教授
こいけ よしあき

自分の中に「公開できるコンテンツ」を持つ！



手によるものというから驚きた。

「情報社会は公開競争。内容がなければ公開できず勝負にもならない。自信を持つて自ら発信できるものを身に付けて欲しい。学生を思い、従来型の大学教育への改革に新たな手法で真摯に挑む。」

eラーニングでは学内の先端をゆく経済学部でその舵をとる瀧澤健太郎教授は情報社会になぞらえて説く、「自分の中に公開できるコンテンツを持つ。瀧澤ゼミ、通称「瀧ゼミ」は徹底的な情報スキルの習得を軸に、外部講師による講演、研修によるモチベーションの醸成を大きな柱とする。「学生時代に何をし、どんな結果を残したかを具体的な形で示せなければならぬ」が持論だ。

個人ゼミでの海外研修は極めて珍しいが、煩雑なフォローとリスクを一手に引き受け「ゼミ生を鍛えるために海外視察を自ら企画する。「研修先では英語で専門的な質問をするため、事前の勉強がかなり必要。研修で刺激を受け、将来のビジョンを明確に描き出す学生が多いですね。昨年はロンドン証券取引所、今年はフランクフルトのポーターフオンを視察。ゼミ生がそこで何を得たかは海外視察レポート(<http://www.zkyo.ac.jp/shubken/zemi/002/index.htm>)を見て欲しい。臨場感を切り取るプロ並みのカメラワークはすべて学生の手によるものというから驚きた。



瀧澤健太郎
経済学部非常勤講師
しぶさわ けんたろう

多様な情報からよりよい人生を導き出せ



ールに合わせる意味に使われることにも違和感を覚えている。「学生には画一的な中から抜け出して本当の意味で自立してほしい。そのため授業です。あれもこれも伝えない。サービスピ精神旺盛な波津先生にとって90分の授業時間は短すぎる。」

現役の新聞記者として、取材でこれまで40カ国以上を訪れた波津先生が強く感じていることがある。日本社会にはゆとりがない。

「海外メディア事情では様々な事件や現象を欧米のメディアがどう報道しているか、その問題と成果を比較検証することがねらいだ。ドキュメンタリー映像や大量の新聞記事を駆使し、講義はスピードに進む。テーマは道路事情から夫婦の在り方までなんでもありだ。報道の仕方には国民性があらわれる。たとえば深刻な問題であってもイタリアのメディアはどうか楽天的にユーモラスに捉えるのに対し、日本のメディアは何でも悲観的にとらえすぎる傾向にある。メディアはよりよい人生を導くための情報を伝えるべきなのに、日本のメディアは幸福の足を引っぱっている気がしてなりません」と警戒感を強める。

欧米では組織に依存しないことを指す「自立」ということが、日本では学校や会社のルールに合わせる意味に使われることにも違和感を覚えている。「学生には画一的な中から抜け出して本当の意味で自立してほしい。そのため授業です。あれもこれも伝えない。サービスピ精神旺盛な波津先生にとって90分の授業時間は短すぎる。」



波津博明
社会学部非常勤講師
なつお ひろあき